一　次の問いに答えなさい。

問一　次の文は、接客の場面で店員が話したことばである。表現が適切なものを、次の**ア**～**エ**から一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア　「伝票にご署名してください。」
イ　「お待たせしました。ご注文のコーヒーになります。」
ウ　「こちらでおかけになってお待ちください。」
エ　「お会計は八百円です。千円からお預かりします。」

問二　次の傍線部の表現のうち、適切なものを、次の**ア**～**エ**から一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア　父は寸暇を惜しんで、郷土史の研究に取り組んでいる。
イ　兄は熱にうなされたように、一日中野球のことばかり考えている。
ウ　ヒット曲の演奏で、コンサートはいやがおうにも盛り上がった。
エ　相手の無礼な振る舞いに、怒り心頭に達した。

問三　次の各句について、季語を抜き出し、季節を漢字で書きなさい。

(1)　草の戸も住み替はる代ぞひなの家　（松尾芭蕉）
(2)　海の音一日遠き小春かな　（加藤曉台）

二　次の文章は、晋の国の大臣簡子が部下の周舎を亡くした後の話である。次の書き下し文と漢文を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔書き下し文〕

簡子朝（政治を行う）を聴く毎に常に悦（よろこ）ばず。大夫罪（部下の役人）を請ふ。簡子曰はく、「大夫罪無し。吾聞く、『千羊の皮は一狐（一枚のきつねのわきの毛皮）の腋に如かず。』と。諸大夫朝（政務に加わるが）するも、徒（ただ）唯唯（はいという返事）を聞くのみにして、周舎の鄂鄂（率直な意見）を聞かず。是（こういうわけで）を以て憂ふるなり。」と。

〔漢文〕

簡子毎聴朝常不悦。大夫請罪。簡子曰、「大夫無罪。吾聞、『千羊之皮不如一狐之腋。』諸大夫朝、徒聞唯唯、不聞周舎之鄂鄂。是以憂也。」

（李瀚『蒙求』）

問一　書き下し文の読み方になるように、傍線部①に返り点をつけなさい。

問二　傍線部②について、次の問いに答えなさい。

(1)　「不如」を用いた次のことわざの空欄に入る、適切な漢字二字のことばを書きなさい。

百聞は□に如かず

(2)　「一狐之腋」は誰をたとえているか。漢文から漢字二字で抜き出して書きなさい。

問三　傍線部③について、次の問いに答えなさい。

(1)　「憂」という気持ちは簡子のどのような態度に現れているか。漢文から漢字二字で抜き出して書きなさい。

(2)　このような気持ちを抱いた理由として最も適切なものを、次の**ア**～**エ**から一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア　物の値打ちを見極めることができる者がいなくなったから。
イ　自ら正しいと考えることを遠慮せずに述べる者がいなくなったから。
ウ　理にかなった意見よりも、声の大きい者の主張が通ってしまうから。
エ　叱責されると知りながら、不愉快なことを言う部下がいるから。

三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

関取谷風梶之助、小角力（若い力士）を供につれ日本橋本船町を通りける時、鰹を かはんとしけるに価いと高かりければ、供のものに①いひつけて、「まけよ」といはせて行き過ぎしを、魚売る男呼びとどめて、「関取のまけると②いふはいむべきことなり」と③いひければ、谷風立ち（引き返して）かへり「かへかへ」といひてかはせたるもをかしかりき。これは a のまくるにあらず、b の方をまけさすることなれば、さのみ（それほど）いむべきことにはあらざるを、「かへかへ」といひしは④はちとせきこみ（あせった）しと見えたり。

（大田南畝『仮名世説』）

（注）谷風梶之助――江戸時代後期の横綱。
日本橋本船町――現在の東京都中央区日本橋の一部。当時魚市場があった。

問一　傍線部①と③の主語として適切なものを、次のア～エからそれぞれ一つずつ選んで、その符号を書きなさい。

ア　小角力　イ　谷風　ウ　魚売る男　エ　筆者

問二　二重傍線部を現代仮名遣いに改めて、全て平仮名で書きなさい。

問三　傍線部②の本文中の意味として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア　評判が下がるので避けるべきこと
イ　恥ずかしいので遠慮するべきこと
ウ　示しがつかないので控えるべきこと
エ　縁起が悪いので慎むべきこと

問四　本文中の空欄 a・b に入る人物の組み合わせとして適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア　a　魚売る男　b　谷風　　イ　a　谷風　b　魚売る男
ウ　a　谷風　b　小角力　　エ　a　魚売る男　b　小角力

問五　傍線部④について、筆者がこのような感想を述べた理由として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア　よく考えると気にするほどのことでもないのに、言われたことをうのみにして谷風が相手の言い値で魚を買ったから。
イ　時間をかけて交渉すれば魚を安く買えたのに、谷風が短気を起こして魚をもとの値段より高く買ってしまったから。
ウ　谷風をだますつもりはなかったにせよ、魚売りの男の一言が誤解を招いて谷風を怒らせてしまったから。
エ　魚売りの男は魚を高く売ろうとしていたのに、小角力の巧みなことばにつられて値引きをしてしまったから。

四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

昭和二十三年のある日、鍛冶職人の六郎の仕事場を、鍛冶屋になりたいと思っている由川浩太という少年が訪れた。浩太は、六郎に仕事を近くで見せてほしいと頼み、翌日から六郎のもとに通ってくるようになった。

翌日、朝早くから少年はやってきた。

夏の休みとはいえ、早朝から少年は凜とした顔をしていた。

六郎の鍛冶屋は一人きりの仕事場だったから見学するような場所はなかった。彼は道具棚を奥に寄せ、そこに林檎箱をひとつ置いて少年を座らせた。

①妙な気分だった。仕事先の人間が仕上り具合いを見にくる以外、この鍛冶場に人が入ることはなかった。しかも相手は子供だった。初めのうち六郎は仕事の段取りがぎくしゃくしたが、火をおこし、鋼を入れるとすぐに仕事に没頭した。鍛冶は熱い鋼とむき合う仕事だからいっときでも気がゆるむことは許されない。②定められた温度でしか鋼は六郎の言うことをきかない。鍛冶の気持ちが歪めば鋼も歪む。鍛冶の仕事が粗ければ鋼も粗いままになる。

翌日も少年は仕事場にやってきた。

朝の挨拶もきちんとできるし、帰る折も礼をしっかりと言えた。感心な子だ、と思った。

三日目の昼時、六郎は少年に訊いた。

「昼飯は家まで帰って食べているのか」

少年は、近くのパン屋でパンを買って食べている、と返答した。

「家で家族の者が食事の用意をして待っとるんじゃないのか」

「家族は母さんと二人で、母さんは働きに出ていますから……」

「……そうか、なら今日の昼飯はここで食べろ」

「いいえ、けっこうです」

「遠慮せんでいい。賄いの婆さんがつくる料理だ。一人分も二人分も同じじゃ」

もう二十年近く六郎の賄いをしてくれているトヨが丁寧に挨拶する少年を見て目を丸くした。A少年の食事を摂る様子を見ていて、六郎は躾のいい子だ、と思った。

トヨの剝いてくれた梨を食べながら六郎は少年と話をした。

「坊は名前は何という」

「由川浩太です」

「歳はいくつじゃ」

「十二歳です」

――十二歳か……、わしが親方の下に修業に行ったのは十三歳の時だった……。

山村の農家の六男で生まれた六郎は親方の下に預けられた時、右も左もわからず毎晩泣いていた。そんな自分の子供の時と比べると少年は落着いて見えたし、何かをけなげに耐えているようにさえ思えた。

明日で夏休みが終わるという日、六郎は浩太に初めて鍛冶の仕事を簡単に教えてやった。聡明な少年だった。七日ばかりの見学で浩太は鍛冶の鋼と熱の関係の大半を理解していた。火の中から赤く熱された鋼を出すと浩太が目をかがやかせた。焼付けをくり返してみせると頬を赤く染めて見守っていた。

時折、感嘆したように、ワーッと声を洩らした。その時、六郎は浩太の右目が傷を受けてほとんど見えていないことを知った。

その日の夕刻、六郎は浩太を連れて三業地(注)にある食堂に行った。六郎にすれば、少年が鍛冶屋になりたいと言い出したのは少年期によくある気まぐれで、汽車を目にすれば機関士になりたいと言うような、Bたわいもないことだと思っていた。夏休みが終わって学校に通いはじめれば浩太は鍛冶屋のことも自分のことも忘れてしまうだろう。

玉子丼を美味しそうに食べる浩太に六郎は訊いた。

「どうじゃ、鍛冶屋の仕事も毎日見ていると同じことのくり返しでつまらんもんじゃろうが」

「いいえ、鋼は毎日違ってるし、同じものは何ひとつありませんでした。ぼくが思っていたとおり親方の仕事は素晴らしいものです」

浩太が六郎を親方と呼びはじめたのは賄婦のトヨやたまにやってくる客が六郎をそう呼ぶのを聞いたからだった。

「そうか鍛冶屋の仕事は面白かったか」

「面白いのではなく、立派な仕事です」

はっきりした口調(ア)で言って浩太は六郎をまぶしそうに見た。

澄んだ瞳で見つめられると六郎は③妙な気持ちになった。

「ぼくは中学に行かずに親方のところに行きたいと思います」

「そうか……」

六郎は笑いながらビールを飲み干したが、少年のけなげさに触れる度、胸の中が熱くなっていた。

一人は杉林の間に連なる径を歩いていた。

時折、二人のすぐそばから鳥がC(せわしない声を上げて飛び立つことがあった。最初、浩太は鳥の飛翔に驚いて六郎にしがみついてきた。

「ハッハハ、大丈夫じゃて。びっくりしとるのは鳥の方じゃ」

笑ってそう言っても浩太は六郎の手を摑んだまま離さなかった。その姿がそのまま五十数年前親方とこの径を歩いた自分であることに六郎は気付いた。当時に比べて山径は整備されているが、今日、六郎が浩太を連れて行く場所までのルートはほとんど同じだった。

杉林を抜けると、そこからはしばらく雑木林(イ)が続いた。沢の径は下り坂になっていてかすかに谷を流れる渓流の水音が聞こえた。

前を歩く浩太がわずかに首をかしげている。

水音が聞こえたのだろう。浩太が六郎を振りむいた。

「そうじゃ、もうすぐ川にぶつかる。川にかかる橋を渡れば青煙(注)の麓まではすぐじゃ」

しばらくすると丸太橋が見えた。

三日前まで続いていた雨のせいか橋の下を流れる渓流には勢いがあった。浩太は激しい音を立てて岩間を流れる川を見ていた。

「大丈夫じゃ。さあ手を貸せ」

六郎は浩太の手を取り、ゆっくりと丸太橋を渡りはじめた。

④「下を見ずに足元をしっかりたしかめて歩けばいい」

六郎の手を握りしめた浩太の握力で、必死に橋を渡ろうとする気持ちが伝わってきた。

（伊集院静「親方と神様」）

（注）三業地――飲食店等の営業が許可されている区域。
青煙――山の名前。

問一　二重傍線部ア・イの漢字の読み方を平仮名で書きなさい。

問二　二重傍線部A～Cの本文中の意味として最も適切なものを、次の各群のア～エからそれぞれ一つずつ選んで、その符号を書きなさい。

A　ア　意外なことに困惑した　イ　立派だと思い驚いた
　　ウ　愛らしくてほほえんだ　エ　不自然に思い怪しんだ

B　ア　深く考えていない　イ　常識をわきまえていない
　　ウ　世間で通用しない　エ　つじつまが合わない

C　ア　気味が悪い　イ　弱々しい
　　ウ　あわただしい　エ　勇ましい

問三　本文を場面展開の上で三つに分けるとすれば、三つ目の場面はどこからか。始めの五字を本文中から抜き出して書きなさい。ただし、句読点やかぎ括弧（「　」）も一字に数える。

問四　傍線部②について、次の問いに答えなさい。

(1)　ここで使われている表現技法を、次のア～オから二つ選んで、その符号を書きなさい。

ア　対句　イ　体言止め　ウ　倒置
エ　擬人法　オ　直喩（明喩）

(2) ここから読み取れることの説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 鋼のことを熟知している六郎であっても、鋼を扱う方法を伝えるのは難しいということ。

イ 卓越した技術を持つ六郎であっても、うまくいくことより失敗することの方が多いということ。

ウ 六郎が熟練した職人であり、鋼を思い通りに扱うことの難しさを理解しているということ。

エ 長年積み重ねてきた経験のために、かえって六郎の鋼の扱い方に柔軟さが失われているということ。

問五 傍線部①・③について説明した次の文の空欄a・bに入る最も適切なことばを、aは【A群】のア～エから、bは【B群】のオ～クからそれぞれ一つずつ選んで、その符号を書きなさい。

六郎は、浩太が初めて仕事場に入ってきたときは、[a]を覚えていたが、毎日通ってくるようになった浩太に鍛冶の仕事を初めて教えたあとは、[b]思っている。

【A群】

ア 親近感　イ 違和感　ウ 重圧感　エ 不快感

【B群】

オ 浩太の聡明さに感心しながらも、核心を突く発言にうまく応えられず、もどかしく

カ 浩太がいちずに自分の仕事にあこがれていることに、戸惑いながらもうれしく

キ 浩太を子供扱いして言ったことに対して鋭く切り返され、きまりが悪く

ク 浩太が自分への敬意を隠そうとしないことに対して、疑いながらも誇らしく

問六 傍線部④の説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 将来に不安を抱きながらも強がっている浩太に対して、六郎は修業時代の経験を踏まえ、自分の気持ちに素直になることが大切だと言い聞かせようとしている。

イ 六郎は、かつての自分と比べると大人びており、誰にも頼らずに人生を切り開いていこうとする浩太に対して、余計なことと分かっていながら手をさしのべようとしている。

ウ 年齢相応の幼さを見せながらも自分を慕って懸命について来ようとする浩太を、六郎はかつての自分の姿と重ねて、これからの人生を着実に歩んでいくよう励まそうとしている。

エ 六郎は、かつて自分も歩いた山径で臆病な一面を見せる浩太をふがいなく思いながらも、これからの人生における苦難を乗り越えるために、勇気づけようとしている。

問七 本文の表現と内容についての説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア 浩太の行動とともに心情を詳細に描写することで、浩太が六郎に対して次第に心を開いていく様子を表している。

イ 六郎の職人としての仕事ぶりを具体的に描写することによって、六郎の仕事に向かう姿勢と心構えを表している。

ウ 会話や六郎の心理描写において、「――」や「……」を多用することによって、六郎の寡黙さと頑固な性格を表している。

エ 六郎の視点を通して浩太を描写することで、浩太に対する六郎の共感が徐々に深まっていく様子を表している。

五　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

現代は機械の精緻さが飛躍的に高まり、従来の単純反復労働を極限まで肩代わりする時代だが、そうなると人間の肉体労働も質的に変化せざるをえない。すでに徴候の見える事態だが、①もの造りは大きく二つに分かれ、それぞれ過去の単純反復労働から訣別（けつべつ）することになるだろう。一つはいうまでもなく余暇時間を埋めるホビーとしての手仕事　もう一つ重要なのは知的活動の延長としてなされる手仕事、すなわち設計図の立体化というべき試作品を造る仕事である。

ホビーとしての手仕事は多岐にわたるが、木工、金工、料理、裁縫、機械製作にいたるまで、どれをとっても作品はつねに一品製作に終わり、しかもその一品の完成が最終目的とされるのが通常である。いいかえれば作業は目的と手段の無限連鎖から離れ、その過程それ自体が目的とされていることは明らかである。［②］作品には質的な高さが要求され、作業は苦しい緊張を③強いられるが、それは芸術制作の場合も同様であり、［④］この緊張が現在の充実をもたらしていると考えられる。現に多くの芸術活動そのものが素人（しろうと）によってホビーとして愉（たの）しまれているが、これはホビーの本質を裏側から証明するものだろう。

これにたいして工業生産の一環としておこなわれる試作品の生産は、産業全体の流れのなかでは当然、目的・手段の長い連鎖に組みこまれている。だがこのことは科学研究を含むすべての知的活動にあてはまることであって、目を向けるべきはその営みの内部構造だろう。そして試作品製作を内部から見れば、これがほかならぬ一品製作であり、その完成が一連の知的活動の終着点であることに疑いの余地はない。試作品は表面的には設計図の立体化を目的とするように見えるが、本質的には逆に試作品が設計の正しさを検証するのであって、目的が手段によって修正を迫られることも少なくない。ここでも明白に⑤時間の意味的な逆転が促され、現在は完結した経過として充実を見せるのである。

こうして多くの実用的な日常行動が芸術に似た時間構造を示すなかで、本来の近代芸術もまた若干の変質を蒙（こうむ）りながらも生き延びてゆくだろう。ここでは(注)ステントのいう進歩は他の知的分野よりも大きな停滞を見せ、その代わりにジャンルの多様化がA サイ限もなく進むだろう。ステントによれば芸術の進歩とは同一性の範囲内の変化のことであり、鑑賞者の予想が⑥満たされるかぎりでの意外性のことであった。だが彼も指摘する通り、現代の先端的な芸術家は個性の発揮を競うあまり、ジャンルの同一性を破るような変化、鑑賞者の予想を裏切るほどの意外性を追い求めたのであった。生みだされるのが進歩ではなく、進歩を計る尺度そのものの変更だったために、進歩は原理的に停滞を余儀なくされた。

これは私の定義によれば現在の充実の感覚そのものが多様化され、時間の逆転の仕方が普遍性を失ったということだが、しかしそれにもかかわらず、芸術が現在の完結の営みだという本質が変わったことを意味しない。むしろ今後、芸術は［⑦］の分野でますます広く愛好され、そのことによってジャンルの無限の多様化にも一定の歯止めがかかるかもしれない。大衆化は芸術のジャンルをも人気B トウ票にかけることになり、親しみやすさを基準とした(注)淘汰（とうた）がおこなわれる可能性があるからである。ちなみに芸術のホビー化は万人を鑑賞者から素人芸術家に変え、結果として職業芸術家の存続を危うくする恐れもあるが、それへの対処は職業芸術家の自己努力にかかることであり、文明の危機とは無関係の問題だろう。

それにしても⑧現代人が現在の完結と充実をいかに熱烈に求めているかは、観（み）る娯楽としてのスポーツの興隆に現れている。人気の野球やサッカーや格闘技のように、対抗試合形式のスポーツがドラマにも似た起伏を見せ、試合ごとに完結した現在をかたちづくるのはいうまでもない。面白いのは記録を争う陸上、水上の競技でさえ、歴史的な記録を競うばかりではなく、各種の競技会を開いてそのなかで勝負を決することである。生理的身体という限界を課されたスポーツの場合、歴史的な記録に永久の進歩がありえない反面、大会ごとの勝負ではその時点における現在の完結を見ることができる。現代人はそうした名勝負に喝采を送り、さながら古代人

が舞踊に感じた充実を享受している。なにしろ世界の大多数の新聞において、今やスポーツ欄のページ数は政治欄のそれを抜いたというのである。

最後にあらためて強調したいのは、知識基盤社会(注)は人間関係のうえでは社交が鍵となる社会であり、人びとが互いに顔の見えるつながりを回復する社会だということである。

知的活動は宿命的に孤独な営みであり、偶然の「湧きあがり」によって動かされる仕事だが、そうであればこそ人は互いに有C(エキ)な刺激を受けやすい環境を不可欠とする。そしてそういう環境は階D(ソウ)構造の固定した「組織」のなかにもなく、まして顔の見えない茫漠(注)たる大衆社会のなかにもありえない。それは相互に尊敬しあえる他者によって評価を受け、個人の独立を保ちながら刺激を与えあう人間関係、ほかならぬ社交の交遊のなかにしか期待できないはずなのである。

そしてこの社交の交遊それ自体がまた、じつは現在という時間の充実、完結した行動の成就というかたちを必要としていることを忘れてはなるまい。もちろん社交は長い時間の継続を基盤とするが、そのうえに立ってそれはときに緊張したサロン(注)の昂揚を欠くことができない。かつて日本の茶道の世界に、「一期一会」という戒めがあったことを思いだしてもよい。一夕の気品ある宴席にせよ、囲碁や将棋を楽しむ午後にせよ、数時間の溌溂と緊迫した研究会にもせよ、滑らかに流れつつも構造を持った時間の共有が人の心を結ぶのである。そういう現在の充実をおりに触れて味わうことが、じつは明日のない無常の世を生きるよすがとなることは、茶の湯が戦乱の時代にこそ栄えたことを思ってもうなずけるだろう。

（山崎正和『世界文明史の試み』）

（注）ステント――アメリカの生物学者。
淘汰――条件に合わないものを取り除くこと。
知識基盤社会――知的活動があらゆる領域の活動を支える社会。
茫漠――ぼんやりして、つかみどころのないさま。
サロン――芸術家などの社交的な集まり。

問一　二重傍線部A～Dの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群のア～エからそれぞれ一つずつ選んで、その符号を書きなさい。

A　ア　サイ心の注意を払う。　イ　無病息サイを願う。
　　ウ　サイ算がとれない。　エ　卒業後も交サイが続く。
B　ア　単トウ直入に尋ねる。　イ　意気トウ合して語り明かす。
　　ウ　対策を検トウする。　エ　会員としてトウ録する。
C　ア　趣味と実エキを兼ねる。　イ　エキ晶テレビを視聴する。
　　ウ　不エキと流行。　エ　エキ伝で優勝する。
D　ア　準備に奔ソウする。　イ　ソウ意工夫を凝らす。
　　ウ　石油を輸ソウする。　エ　深ソウ心理がわかる。

問二　傍線部③・⑥に含まれている動詞の終止形を書きなさい。

問三　傍線部①について、「もの造り」は何と何に分かれるというのか。本文中からそれぞれ八字以上十字以内で抜き出して書きなさい。

問四　空欄②・④に入ることばの組み合わせとして適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア　②たとえ　④さらに　　イ　②たしかに　④なぜなら
ウ　②もちろん　④むしろ　　エ　②すなわち　④まして

問五　傍線部⑤について、「もの造り」における「時間の意味的な逆転」を説明した次の文の空欄に入る最も適切なことばを、a・bは【A群】のア～エから、cは【B群】のオ～クからそれぞれ一つずつ選んで、その符号を書きなさい。

従来の単純反復労働によるもの造りにおいては、［a］は［b］を達成するためのものだったが、現代のもの造りにおいては［c］ということ。

【A群】
ア　a　作業過程という手段　　b　完成という目的
イ　a　知的活動という手段　　b　作業過程という目的
ウ　a　完成という目的　　b　作業過程という手段
エ　a　作業過程という目的　　b　知的活動という手段

【B群】

オ　達成された目的が次の目的を達成するための手段となり、それが繰り返されるようになる

カ　手段が目的から切り離され、目的に到達するまでの見通しを立てることが困難になる

キ　手段そのものの価値が高まり、手段が目的となることや、手段によって目的が見直されることがある

ク　目的と手段が入れ替わり、手段そのものが重要視され、目的を達成することには価値がなくなる

問六　空欄⑦に入る適切なことばを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア　鑑賞　イ　産業　ウ　職業芸術　エ　ホビー

問七　傍線部⑧について、「現在の完結と充実」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア　もの造りにおける一つの作品の製作と同様に、スポーツにおいても試合や競技会ごとに勝負を決するまでの時間が、変化に富んだ展開により、観る者にとって充実したものになるということ。

イ　芸術のジャンルの多様化と同様に、スポーツにおいても様々な種目で競技者が個性を発揮することで、再現することのできない充実した勝負が繰り広げられ、大衆を熱狂させるということ。

ウ　芸術の大衆化と同様に、スポーツが観る娯楽として大衆に親しまれるようになった結果、歴史的な記録よりも人気に左右されるようになり、かえってそれぞれの大会が充実を見せるということ。

エ　もの造りにおける作業と同様に、スポーツにおいても大会に至るまでの過程が重要な意味を持つようになり、観る者の予想を裏切るドラマのような名勝負が、観る者に充実をもたらすということ。

問八　本文に述べられている内容として最も適切なものを、次のア～エから一つ選んで、その符号を書きなさい。

ア　現代社会では他者との心の結びつきが失われてしまったので、顔の見える人間関係を回復させるために、茶の湯などの伝統的な交遊の場が必要である。

イ　知的活動は偶然が影響する孤独な営みであるからこそ、互いに尊敬しあい刺激を与えあう人間関係の中で、充実した時間を共有することが求められる。

ウ　現代では顔の見えない大衆社会の中に個性が埋もれてしまっているので、知的活動を充実させ、個人としての独立を保つことが求められる。

エ　現代の人間関係は緊張を強いられることが多いため、囲碁や将棋など仕事以外の場における顔の見える交流を通じて、余暇時間を充実させる必要がある。

受検番号　　番

平成二十八年度兵庫県公立高等学校学力検査

国語解答用紙

一 点			
問一 点	問二 点	問三 点	
		(1)	(2)
		季語	季語
		季節	季節

二 点				
問一 点	問二 点		問三 点	
	(1)	(2)	(1)	(2)
毎ニ聴ク朝ヲ				

三 点				
問一 点	問二 点	問三 点	問四 点	問五 点
①	③			

四 点										
問一 点	問二 点			問三 点	問四 点		問五 点		問六 点	問七 点
ア	イ	A	B	C	(1)	(2)	a	b		

五 点												
問一 点				問二 点		問三 点		問四 点	問五 点		問六 点	問七 点	問八 点
A	B	C	D	③	⑥	8字			a・b	c			

得点